ゑ
74

好古
集覽

革究圖考

完

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

国立国会図書館　タイトル『革［ゼン］図考』　請求記号 ゑ-74

梵字入獅子文韋

天平韋と唱ふる物は古き韋の捻名なり御免韋と云ふも正平韋の前ふり迄をさす

獅子唐花文韋

獅子の文韋

菱菊の文韋

八幡の文字入文韋

獅子圓文韋

菱文の文韋

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

不動尊像文章

義家卿弦走

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

不動尊文章

佐々木盛綱の弦走

不動尊文章

古甲冑所見

豊琴子藏

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

獅子唐花文韋

獅子の文韋

重盛卿の甲冑

獅子九菱文韋

獅子牡丹の文韋

獅子の文韋

新羅三郎義光甲冑

雑文の毧韋

義家卿の甲冑

亀甲形文韋

花菱文韋

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

蝶唐草文章

鴛鴦の菱文章

雷公の文章

頼朝公甲冑

雲珠の文章

獅子の文章

義経朝臣の甲冑

風伯の文章

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

獅子面文章

獅子の圓文章

龍の文章

大内義隆甲冑

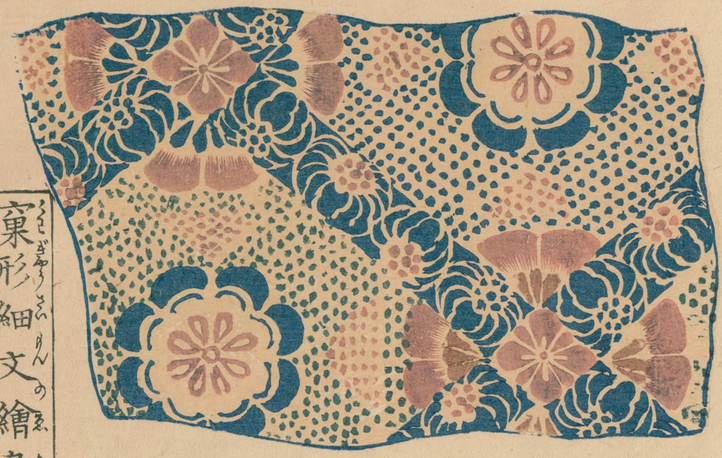
獅子菱文章

圓文の亜章

月星入獅子文章

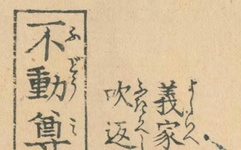
揃正成甲冑

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74



寮形細文繪章

六曜巴文章



義家朝臣鬥吹返の章

不動尊像の文章

鳳凰圓文章

龜甲形文章

梵字入龍文章

大内義隆強走章

獅子の文様

鳥の文様

円の文画様

龍文様

円の文様

波兎の文様

龍文様

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

牡丹蝶文韋

牡丹獅子文韋

義経朝臣弦走

獅子牡丹文韋

義経朝臣弦走

獅子面文韋

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

龍の文章

俱利伽羅文章

圓の花文章

鹿の文章

鷲の文章

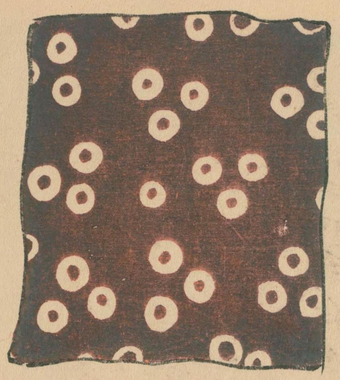
菱の文章

獏の文章

籠目文章

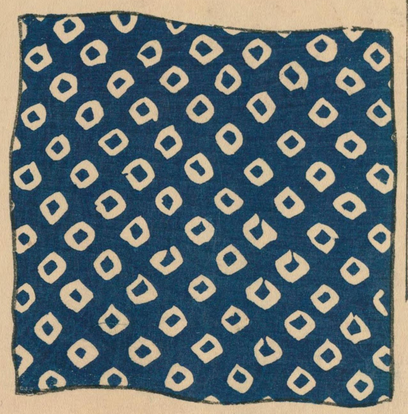
国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

目結章



纐纈章

繁目結章



纐纈絞章

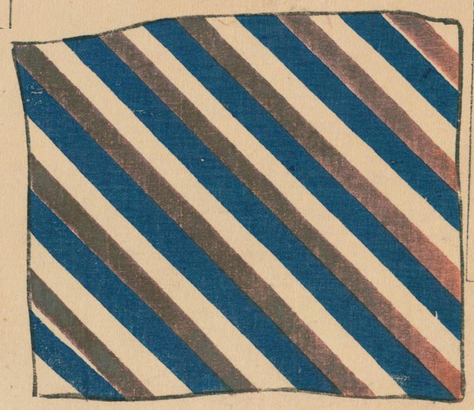
目結鹿子章

纐纈章

縠目結章

縠目章

縠目雜色章



伏縠目章

摺縠目章

十一

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

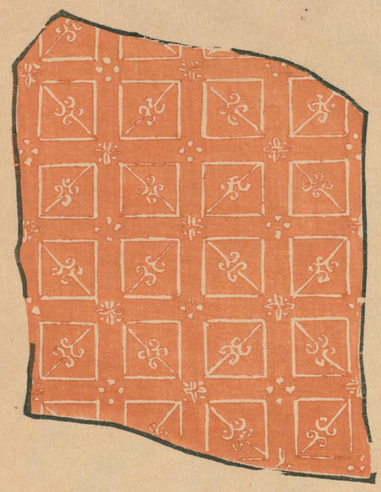
錦 韋

細文 韋

細文 韋

細文 韋

錦 韋

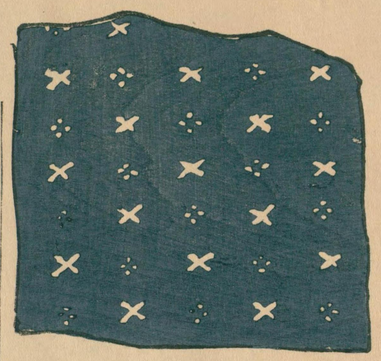


細文赤 韋

錦 韋

紫 錦 韋

細文 韋



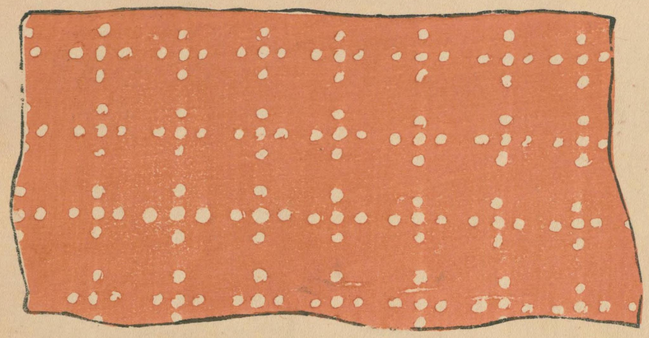
錦 韋

御免 錦 韋

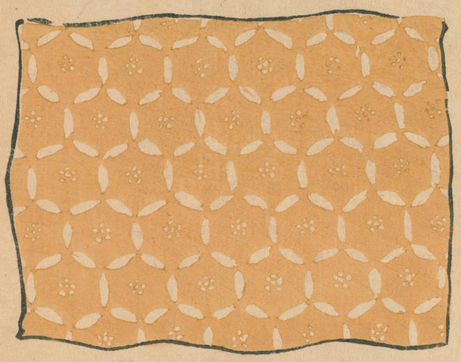
十二

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

五星章

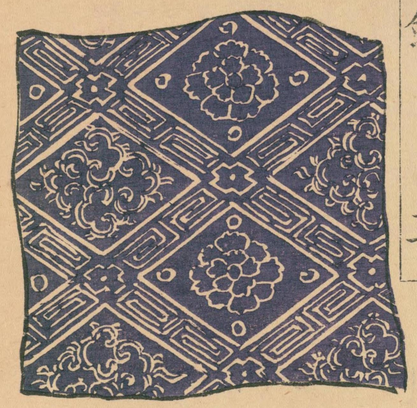


細文章



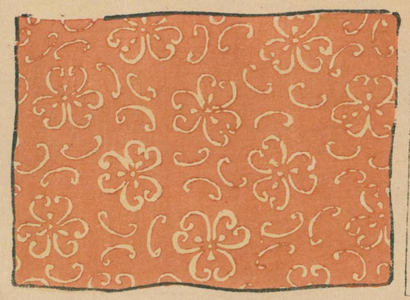
錦章

錦章



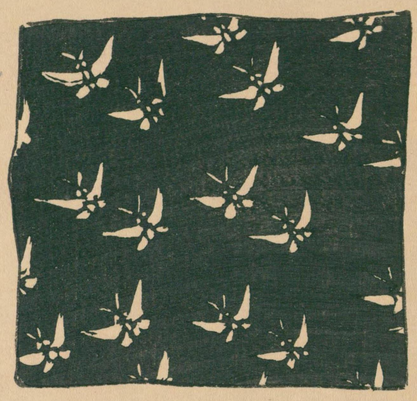
細文章

細文赤章



黄小返文章

細文章



藍小櫻章

黒小櫻章

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

伏縄目章

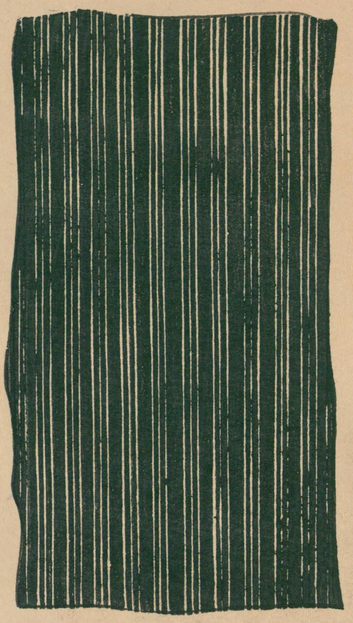
横筋章

糸引目章

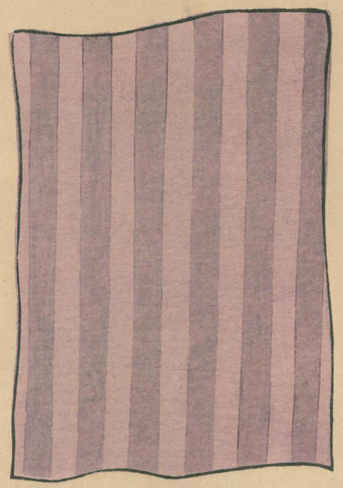
引目黒章

色筋章

引目章

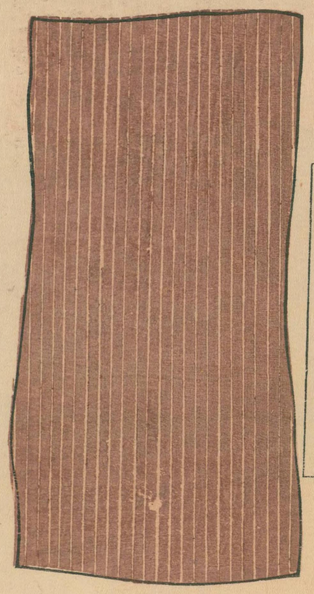


色筋章



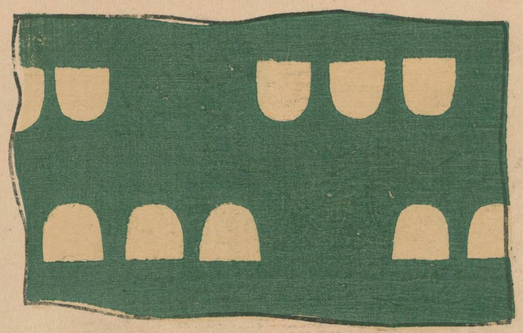
引目章

引目章



国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

凡形菖蒲章



杉立菖蒲章

異文菖蒲章

薄菖蒲章

家形菖蒲章

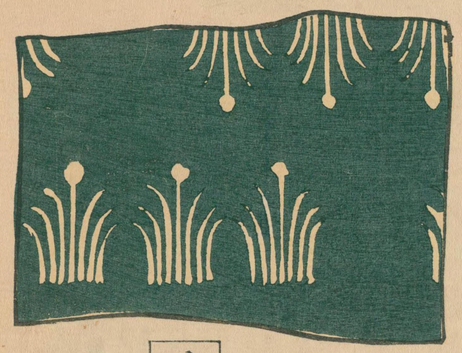
廬雁菖蒲章

楓鹿菖蒲章

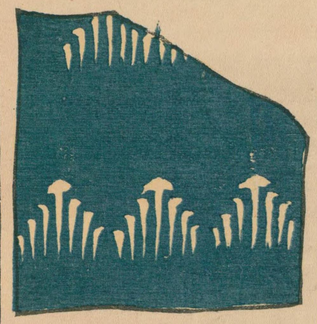
国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

杉菖蒲章

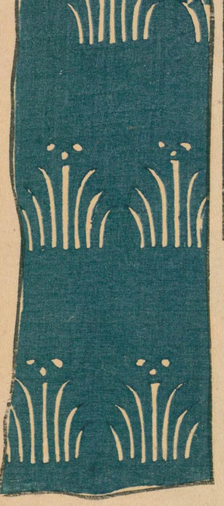
竪菖蒲章



釘菖蒲章



菖蒲章



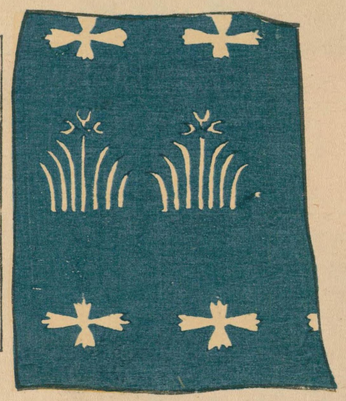
野馬形菖蒲章

横菖蒲章

水菖蒲章

比花菖蒲章

鱗形菖蒲章



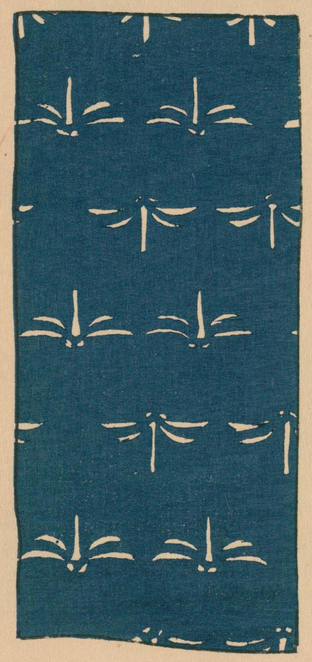
勝見菖蒲章

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

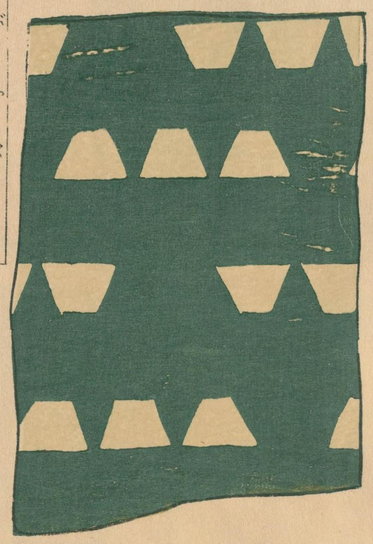
齒朶韋

齒朶韋

蜻蛉菖蒲韋

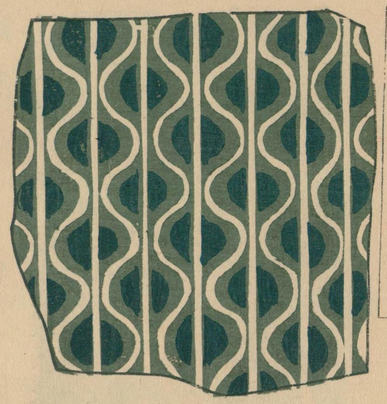


角形菖蒲韋

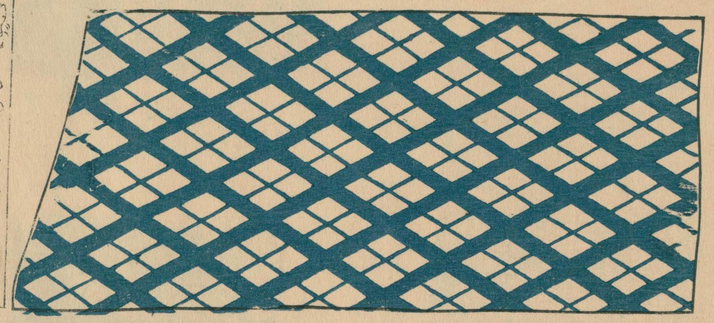


小櫻燻韋

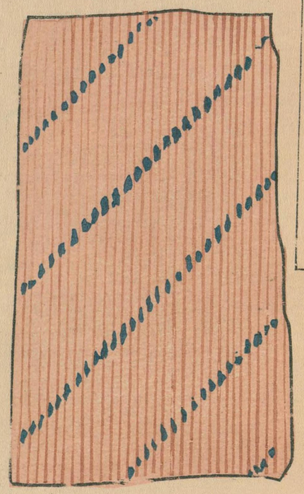
鶉巻韋



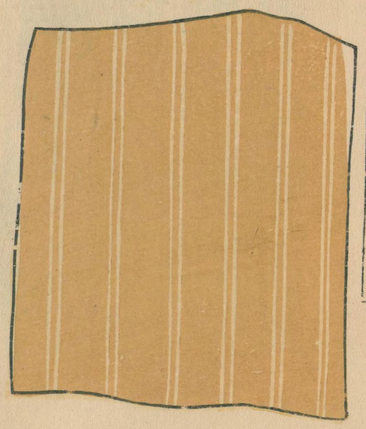
鈍色燻韋



燻筋韋

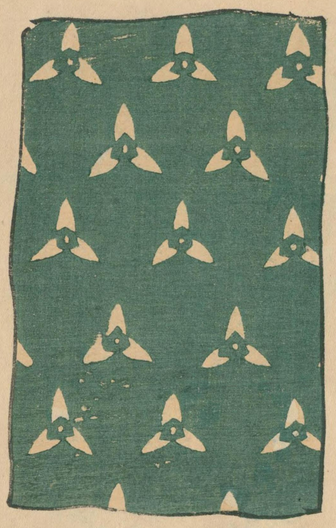


濃柑子韋

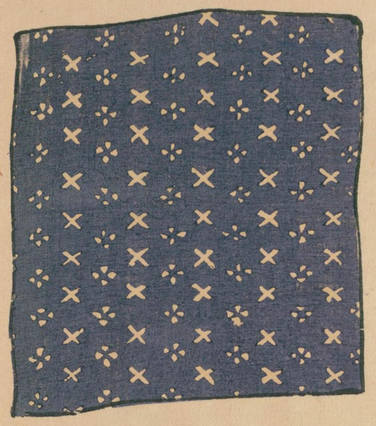


国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

澤瀉細文章



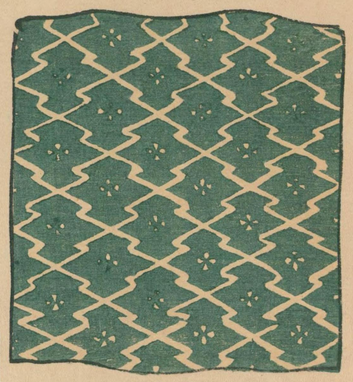
紫細文章



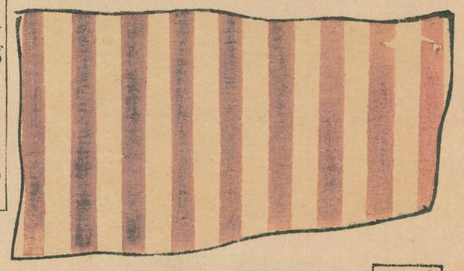
蝶鳥細文章

小櫻擣章

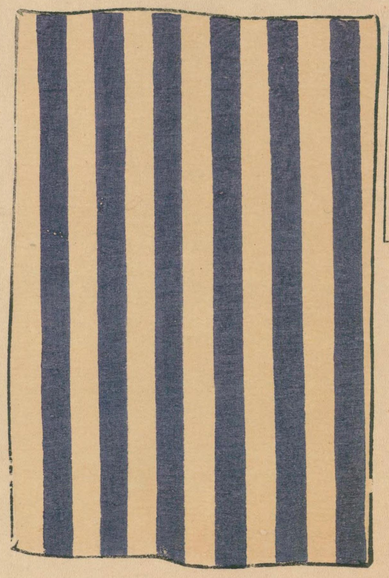
松皮細文章



茜筋章

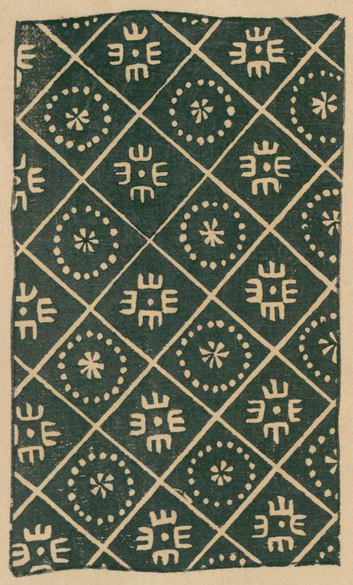


紫筋章



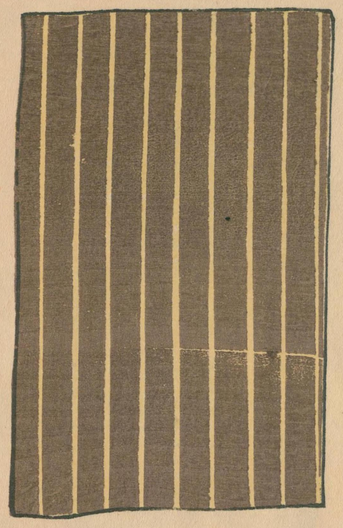
花鳥藍章

細文黒章

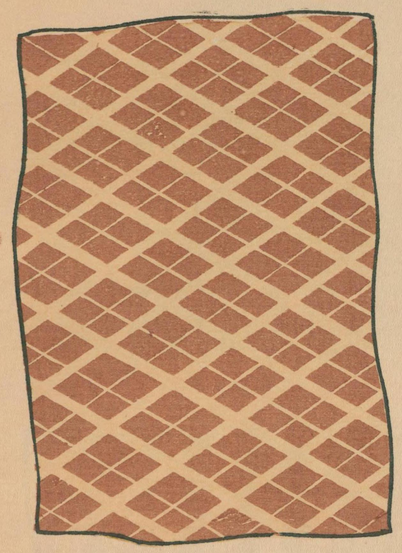


国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』 請求記号 ゑ-74

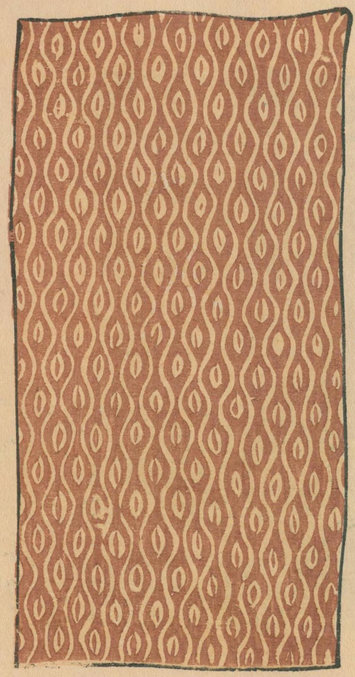
巻悳韋



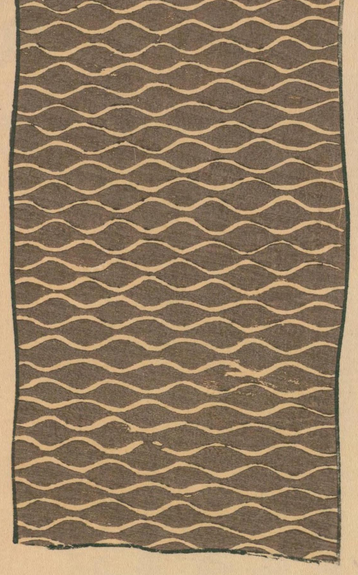
濃悳韋



鶏卵韋



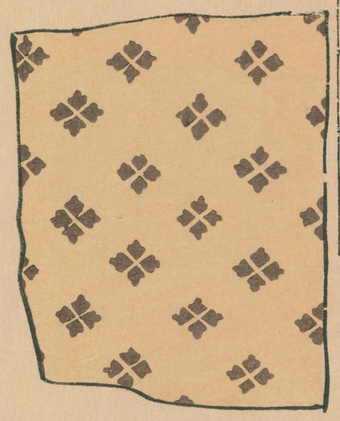
水巻悳韋



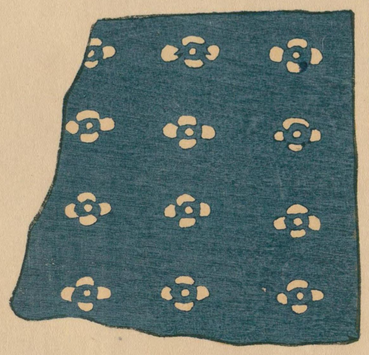
黄白地文韋

浅黄の文韋

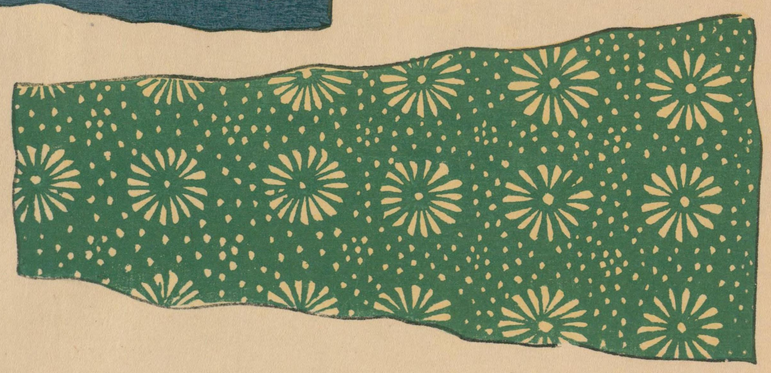
悳文白地韋



鈍薄花田文韋



黄ホ返し紫藍細文韋



国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

革究圖考

江戸　池田源義信編輯

素革　革字彙各額切皮熟曰韋生曰革說文皮去其毛革更之革易也小補
韻會ナメシカハ徐曰皮去其毛染而瑩之曰革禮記膚革充盈注膚是革外
之薄皮革是膚內厚皮也周禮革謂干盾也又三革甲冑盾也說文革古文
革从三十二三十年為一世而道更也革革俱同也

倭名類聚鈔ニ革ハ獸の皮の毛を去るを云和名都久利加波と見ゆ是を諸の獸の
皮を取て脂を去て堅からざる物ゆて理皮と謂る意也今俗ニ鍛皮と云るもの是也
此革ハ諸の色を以て染なんぞ非ず倭名鈔ゆ欅枌革黃櫨革紫革褐革等乃
名を載て皆都久利加波と書れハ誤なるあや埃嚢抄ニ革を染革ゆ用ひ是を都
久利加波と云と見えても誤を請て傳えるまゝなるべし延喜式ニ犬皆皮と革と云

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

別ち記さゞるべし革と韋と相似る故以て誤寫の謬なるやも傳へ難くなるべきやや皮を倭名小加波と云るハ凡生る物皆是を被ふべきなり釋名小皮を被也といふも意ハ同一又獸の皮を剥て理むる革ハ更ると云義也皮と革と韋とを分ち稱しい毛なる皮小ハ皮の字を用て加波と云ふ毛を去を理むる故都久利加波と云て革の字を用ゆ製り熟をて柔なしむるを乎之加波と云て韋の字を用ゆ此三ツの物を總て加波と通稱ふ故小文小書るゝ備を用ひて別ざるも有るなるべし正義小曰文小射すときハ皮革異也故に掌皮と云秋ハ皮を斂冬ハ革を斂むと文を散ずるときハ通ずと云へり

韋

字彙柔皮熟曰韋生曰革又脂韋言其柔輭也 脂韋説文獸皮之韋可以束枉戾相韋背也皮剥得獸皮也強取也

新革 阿良加波と云素改め更る義也 説文小其毛を治め去てこれを是と革め更るなりと云意相似ゝり温古 攷證韋に洗革とあるとも新革と洗革とハ異なるべし

洗の字を用るハ水小浸して釋し製せゞなり世小鹿の革を以て水小浸し雨露水濕を受て堅からざらしむる故洗革と云ふんど古を考ざる誤説なり延喜式小洗革一百張又女鞍を造る料桂甲を修理る料等皆是を用ゆるこゝえり保元平治物語平家物語源平盛衰記太平記等小洗革威の鎧と見えるハ是なり武雑記小力革ハ白滑なるべしと見えるまバ天文水禄の頃既小洗革の名ハ亡びて白滑と云るなるべし 温古 攷證 洗革の説文小よりて物小あるさるハ誤まりと云

按小阿良加波小洗字を用ゆるハ安穏なるゝぬゆや新皮と書てとを然るべきゆや新なるハ儀なきならん皮ハ新しき皮と云べき略語もあらん洗革ハ染革れ名ふく混として論ぜるハ癖事也洗革の説も安齋先生の考証を以て是とすべし 平義器談

軍器考漂義軍用記武器考証其外諸書小見えり素洗革と云ハ薄紅ふて染る革にて威しる鎧を洗革と云事ハ緋の革を洗ひ秃しる心なり参考保元物語京師本杉原本半井本等ハ義朝が幼少の子供殺さる時兵共袖を濡す中小も波多野十郎ゞ赤革威（京師本小ハ緋威とあり）の鎧の袖洗革ゆやなりぬんと云事見えり 是

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

涙少、赤華緋威の華洗ひて色薄くなり洗革になりぬべしとの意なり近世よ
説ふ洗革といふ革のさらさね藥を水ふ入て洗ふる革ありと云ふ妄説と見ゆ以上伊勢貞丈説
是洗革と云ふ薄紅の革の証とすべし兵ども大勢並居うふ波多野が鎧だり洗革
ゆやまりぬんと云ふ薄紅を洗革と云べくて明白し日本紀天智天皇六年の條は桃花
布をなう染布と讀む是も洗染と云てふて紅を洗ひて薄く桃の花色ふなりうる意也
桃染布衣服令ふ桃染衫と見ゆ萬葉集に桃染褐とみえ延喜彈正式ふ桃花布衫
と見ゆ江家次第ふ荒染となり洗染ふ洗染るの畧語あれども皆倶ふ退紅を云るなり
諸の色を云ぞして退紅ふ限りて洗革といふなりとぞ此阿良加波とのみ牛馬鹿など
の皮を製るなり主税寮式ふ太刀の緒の料鹿の洗革一條とあるふ新皮の事にはあらじ
白韋　倭名鈔ふ韋ふ柔皮なり乎之加波と名ぐるはみえたり平須と壓腊熟の義あり
延喜式諸國年料供進の雜染革の中ふ白韋三十張と見ゆ飾抄ふ黒漆の劔白韋

表束と云江次第抄ふ白韋を以て鞆の緒を着とも云ふ千世白韋と稱ふる　俗ふ真韋とも云ふ皮を製れる中に其釋ー製るれ極まる物ふて毛皮と改め更ること爰ふ限まるの謂ひべし此韋ふ麋鹿の屬の皮を以て練り製ると其膚へ艶々
なるのみ極て白く文色ふ染べき佳品ありこの全倭名鈔ふ鹿皮を以て半靴を
作る我單皮とのみと見えふ此韋なり本草ふ鹿皮ふ膳るとも其韋の右ふ出る物ふ皮
極て細膩こと珍重ともと云り國書ふも多く皮革の文字を用て韋の字を用ることも
少きふ通ド用ると傳寫の誤るとふ依ふりのみや

滑革　究ふ皮革を柔にあるを也滑すのお名ふふまる也諸の色を以て染て光彩瑩滑
ふせる義也古き書ふ滑革と云るふ皆色染の洗革をいふなり俗ふ白滑鹿滑革など
云るふ近き世の謂あり唐土ふふ鞾と云あれと訓ぜ論語の注及び説文ふ鞾ふ毛を
去る皮なりと注ありて韋の字の注と同ふうせるふ足ざるふ似たり徐氏が曰鞾ふ皮の
其毛を去て染て是を瑩くを革鞾と謂と詳の説あり爰を以て考まべ鞾の洗革な

事柄知るべし

字書ハ曰革の字注ハ徐氏の説を引て染て是と堊くを革となるべし鞋と革と通ハ用ゆるべきあり鞋ハ柔革なりとぞ云へり是もやさ鞋と同からざるやも

皺文革 又作波文 内藏寮式ハ皺文革一張桃華蘂葉ハ靴の帯ハ皺文の革と見えたり 運器考ハ曰延喜式ハ皺文と書て比岐波奴と訓ハ皮の文れ皺めるハ蟬の膚ハ似さるべからく云なり 其革の文理皺皺粗らなるゆゑ今俗ハ云皺革大倭革など云是あり牛の皮ハて製るなり式の雑履を縫ひ作る料の條に見ゆ享徳三年ハ記せる鎌倉年中行事播磨皮の白き力革と見ゆるべ播磨滑などゝ稱するゆゑ

赤滑革 赤革 鷹司家傳抄ハ永治槻記ハ云如法の飾劔ハ必赤滑革の定緒を用ゆと見ゆ後照念院殿装束抄園大暦 飾抄名目抄おどろも皆赤滑是ハ用るよう見えたり略そ赤革とも云を諸鞍日記力革ハ赤革とも記異本等に赤革威とぞり 運器考ハ赤滑のことゝりとみゆ今神社佛寺ハ藏むる古き鎧の菱縫などゝ多くハ此革なり今俗ハ頼粉革とぞるハ然るべからず

紫滑革 飾抄ハ嘉禎元年御佛名の次第或ハ公卿飾劔紫滑装束ともみゆ西三條

装束抄ハも飾劔装束紫滑を用ゆと見えたり

櫨滑革 諸鞍日記ハ泥障とそ馬の革を黒く塗とり根本琵琶の撥盤を塗ゆゑて櫨の木ハ汁そ染るなりと云を又枳ハ作ハ

青滑革 世俗浅深秘抄ハ東宮の護劔壺軒の装束青滑革ハ延久の御記のこと此青ハ緑ハなされども青柳青葉あど云類ゆゑ此革の色も深き緑ありと云つたり

藍滑革 浅深秘抄ハ劔の装束奈女志の時ハ紫淡を用ゐと園大暦嘉禄三年の宮槻記ハ劔の装束青滑とあるハ藍滑革ハ是ハ物二ツハ名二ツあるハ誤写を正さるべし藍濃革ハ藍濃ハて染るゆゑハて別あり

○

染革 色革 是ハ革を諸の色諸の文を染ハ總ての名なり延喜式雑染革一百大十張と見えて其中二種ハ各四十張二種ハ各三十張一種ハ二十張を分て其名を出されハて染革と云ハ捻ての名ある事明けし大和物語ハ太刀の緒ハすぎ革を需ハん歌よりなど人れ頼の

ゆるりあつれかへのきの深さ或はそやくみあむし見ゆ東鑑ふ吉田の庄より年貢の送文の中ふ深革二十枚と見ゆ東山殿年中行事に深革三枚畠山殿是を進上ひとみえたりまた東鑑に永福寺薬師堂供養の時僧侶の御布施物の中ふ色革百枚或ハ三十枚と見ゆ今昔物語ふ布の衣の袖色革を縫合せたるとみえたるも捻ての名なり

紫革　延喜内蔵寮式ふ紫革四十張左馬寮式ふ紫革四條あどでみゆ倭名鈔ふ赤の名を載せ愚管抄人車記梅松論等に紫革威とも装束圖式ふ是を無文紫革とこえたり古への紫紋深しの紫草を用ゆ此革亦然あり今世革を深るの多くふ蘇枋の煎汁よ色を添用ゆ古しへの物と少あく差たるなり

緋革　延喜式ふ緋革四十張或ハ十條あど見ゆ倭名鈔ふ緋革あり江次第ふ犬飼ハ紺布の狩衣緋革袴とのみ今鏡ふ物の部の緋の革ゐて火威とかきたると見ゆまた此革ゆえなくべし古き書よハ緋威火威通しく用ゆ

柔皮深法ふ緋革製るハ茜根を用ゆと見え古へ茜根を以て深しを緋と云紅花ゆえ深しを紅と云るとも延喜式ふ見えず後世其實を失今漢土ふハ是を韝と云説文ふハ茅蒐深革ことと云韻會に赤革と注せり鄭氏の礼圖ふ臂鞲ハ朱革を以て為るといへり

蘇枋革　赤革　倭名鈔ふ穠枋革の名見えたり盛衰記ふ弦袋左右兵衛尉ハ赤革とも浅深秘抄ふ近衛次将随身後緒ふ於ていハ赤革用ゆと見ゆ布衣記布直衣ふ赤韋の組ゆ今昔物語ふ紺の狩衣の着服ふ赤革を袖ふゆとみえたり　胡曹抄ふ赤色ハ櫨と茜ふて深ことあり保元物語京師本の記しと軍器考ふ引ゾ緋威を緋革より少しく濃を云ゆ今も蘇枋を煎ふ黄柏を少しかふ色ハ殊に鮮あり礼の月令の注ふ色深きを赤とのハ色浅きを赤とのハ色ハ穠枋の一ひねりなどとも正あくきの革ふて威せしと見るものから古記書ふハ赤革と書べきことなり

黄櫨韋　又櫨韋　倭名鈔ふ黄櫨韋の名を載ル装束櫨韋おまべ袍服後緒も同しく櫨韋を用ゆとみえたり倭名鈔ふハ櫨ハ今の黄櫨

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号　ゑ-74

木和名波迺之と見ゆ是を中略して波之と云此韋是を以て染む古き物ゆ憲章の色れ如く染し物ゆり式の染料を以て此物ある事をもりぬ安齋先生の兵器辨考ゆ櫨ハ黄ゆ赤をゆる色也今紅ゆをと云是也後成恩寺殿の女官裝束抄ゆも紅葉の衣表萌木裏黄とあり是表裏の色赤と黄と合せて紅ゆ紅葉と名付る也櫨ゆもづの木也ゆの轉語あり枝葉楠の木に似り秋の末霜ゆ逢ハ初ハ黄ゆあり赤と黄を兼終ゆ紅となる其中比の色をはゆ色と云て染物の名ゆ呼り順徳院百首の御歌ゆ「むらもみぢ」をもれ里のそめむもきこも染ぬれゆて秋風ぞ吹く又民部卿為家文應二年毎日歌ゆ「ゆうまぐれ峯よりくれハ」秋ゆるほりうつろふ

黄韋 延喜式ゆ黄韋三十二條と見ゆ弓法集一統ゆ三議と云 鞠の緒秋ハ黄韋とみえり

青韋 裝束圖式ゆ飾劍裝束藍韋青韋等も亦倒りとも浅深秘抄ゆハ無文の青韋とみえり凡韋ゝ染るゆ各先施をべき法ゆりて後ゆ色ゝ染む此韋藍澱を以て緑色ゝなるべき也青滑の條法と異なる事ハ柔皮染法ゆ見ゆ

褐韋 藍華 倭名鈔ゆ褐韋とも爾雅ゆ云褐ハ黄黒色あり用集ハ紺地ゝもと訓るハ褐の字義穏ならざるべ是ゆ代ゝ借ゝ用ひゝ字妓出せるあらん此韋藍澱ゝ染ゝて殊ゆ濃ゆなりて飾磨の搗染ゆ似ゝるべ也信實朝臣の歌ゆ紺の頭巾とゝ衣以て紺ハ異あるとハ衣あるべ褐華なりゝ是ゝ藍華と云盛衰記ゆ明春ハ甲冑の鎧直垂裝束抄ゆ云紫の平緒ゆ藍韋の丸緒ともゝ名目抄ゆ劔の裝束又ハ藍華ありとを見えり飾抄ゆ無文の藍華とゝ云有文の藍華ある故なるべ

烏韋 同皂韋 黒韋 令ゆ女官の朝服六位以下ハ白襪烏皮履と見ゆ義解ゆ烏皮ハ皂皮ゝ云とり延喜式ゆ雑履ゝ縫作る料ゆ皂韋とみえり烏皮ハ烏韋あり又皂韋あるべ

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

後小云る黒革なるを也東鑑保元物語平治物語盛衰記義経記太平記梅松論應仁記等諸書ニ黒革威の事ハ出さず悪得隨筆ニ云近世山城國八幡山の下大谷村ニ住せる神職十八家黒革を染る故ニ八幡黒と云と見えさず或人曰大谷村の邊りニ品手村と云所ありて染出ス革を品革と云と然りや否ハ猶誤て歯朶革のごとくするハ非也

○

縅韋　目結韋　延喜式ニ纈韋三十張と見ゆ倭名鈔ニ纈韋由波太加波即ち交纈あり とみゆ宗五入道記ニ丹波目結引目韋と見えて目結即ち是也軍器考補正ニ纈韋ととりん後の誤まりて纐目韋ハ是等みな括り染るそ其文大なるも小さなるも純色なるも雑りなるあり今の義解ニ色文絲以て纈文を為すとも式ニ韓紅地彩色文纈を云々と多くも色を錯るの也亦緑縹紺の纈とある故義解ニ三色名特り用る事を得と見えしの色を交るるの也式ニ二目結一ト目結あり

縅目色韋　伏縅目韋　長門本平家物語盛衰記等の文ニ坂東よハ縅目の色韋を多く

候へと（佐殿の巻へ條頼朝の効き遣之）見え亦伏縅目威の鎧の名ハ諸書ニみえさず平家物語保元物語盛衰記義経記等の文ニ坂東よハ縅目ニ作さず異本保元物語庭訓往来よハ据縅目ニ作り尺素往来よハ据索目ニ作り庭訓和尚の庭訓往来ニハ附子縅目ニ作り尺素往来よハ据索目ニ作るハ皆仮字なり伏縅目と書ニ作るハ其韋の彩ニ一色なるも三色なるも染の濃きも薄きもなり又濃きと淡きと或重孫係て九折ニ染る角なるもなり丸を付るもあり其韋を裁て威しる文幕の手の縅を伏る如く見ゆる故ニ伏縅目と名つけしあり縅目色韋とのみを以て其品の多きハ知るべきなり

引目韋　絲引目韋　宗吾入道の記ニ素袍の紐丹波目結引目韋おとを付とも上覧記ニ鞘巻の下緒ニ引目韋ありともみえ柔皮染法ニ縅目韋を作る事を記せり中に糸を以て纏ひ染る故絲引目と見えしの韋の文の様も号しの義も詳なり武州御嶽の社ニ蔵むる畠山庄司の鎧冑の眉庇の裏を色しの韋是ニ相似り古く有けるものあるべ

なと其名ハ聞えず引目と云る名のみえ一ハ東山殿の頃よりぞ始りけん古へ黄ハ返一小紋の韋と心得へがハ此目引革ハ返一小紋の韋と心得まるがらといハ其名ぞ一定ならず

色革筋韋　文明殿中日記ハ茜筋韋三枚と見え諸の色なる事ハ推てしるべし

○

畫韋　天平韋　正平韋　延喜内藏寮式ハ画韋二十張と見も軍器考補正ハ卯槽の所々包める色韋ハ普各其名ハそなりぬるめど聞もなくそれ此画韋といへる種々の文なるべし画韋とハ捻れども延喜式ハみえず画韋と云もの是ぞ

名ハて其文ハ倚て名をまうけ何々の画韋とハ云なるべし

天平韋正平韋と云ハ古になりて画韋と云一物あるべし天平韋正平韋とハ名ハ近き世の俗ハ出る所ハて古書ハハ聞えず近来造り出せるものハ不動尊像獅子牡丹などの古の文ハ倣て製すれども古の製ハ比すべ殊ハ拙く鎧造るべき料ハ充ず菊地佐々傳記附録ハ曰天平韋の板肥後國ハ代古閘橋の邊ハあり

土人の説ハ天平韋ハ中ハ天平十二年八月とありて不動像及び八幡の二字梵字等なり神佛の像ある故商買を忌憚てハ征西将軍懐良親王ハ代の高田ハ陣くる時ハて南朝の正平年中ハ別板を彫て給ふ是より御許を得てそ正平御免韋と称ひ此板ハ正平六年六月朔日とあり諸國正平染の権輿あり武林原始ハも是を引きたり軍器考ハ曰正平韋とハ物異邦より来るとも又南朝の朝廷ハて染させ給ふ事ハ嘉慶の頃鹿苑院公方へ紀伊國矢田の庄より其板を進ぜるまゝとも云異朝の物ありと云事心得ぬ南朝の号ハて其六年ハ南北一統てそ北朝観應の号を止めるまゝ天下悉く正平六年と号ひ再南北分るまゝ南朝ハ終ハ亡びさせ給ひしど其号ハ空く此韋ハ止まれ紀伊國ハ從来南朝の領させ給ひしが所ハれが後ハ此物彼國より出ハど云事さもなりぬべし軍器考補正ハ云肥後國より染出せる物を肥後韋と云天平十二年八月と云文字を今に染うりある故ぬや餘まハ舊まゝ手号ハなるぬや往古の染様あんハ脇盾を包む韋も染付なるぬや手号ハ古ハ

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号 ゑ-74

此包料なれハ不審ー安齋先生の軍器考頭書ニ正平御免革ハ即ち今の正平革なり此外ニ御免革と云のあり赤黒色ニ白く文を出せる染革なり紫に白文なるハ錦革を室町將軍の御物ニ用ひ故常人の用ることを禁ぜらる赤黒色ニ白文なるハ御免ニて誰も用ゐ其色紫ニ似るゆゑ正ニ錦革ニ非ざる故御免也とみえたり

牡丹獅子文革　高館草子志太草子などニ獅子ニ牡丹の脇楯ニと見えハ此革なるべー今も古き鎧の世ニ存るを見るニ此革を用ひしもの多ー其色の紺あると朽葉色あると文の大なると小きあると遠き世の製と近き世の製と其品多きニ擧て書がたしー

南朝より前の物ニも藍ニ染ー革を藍正平と云ハ此僻事なり

不動尊像文革　藝州嚴島社の祕藏源義家朝臣御着長と云ハ物の弦走ニの革是也

往古ハ多く藍殿とて染ー革を後ニ朽葉色の黒めるニ染ー故や此革今肥後の國より染出せるニ天平十二年八月日とあり此革の獅子ニ牡丹の正平革とハ異なり

二品なるべハ染出さゞる此革を天平革と称るあり

獅子圓文革　布衣記ニ力革獅子の充ニ色むと云高忠聞書ニ鞭の執柄獅子の丸革為ニ

獅子面文革　布衣記ニ切付ハ水豹皮上舗同ー皮或ハ獅子の面革とみゆ

三笠甲矢沙汰記ニ錦革とハ紋を付て紫ニ染ー革を云當世是を面革ともゝ中原高忠聞書ニ錦革とハ面革の事ありと見ゆ

ずなりもなぬ　物の面ニはむぎ革を面ニ革とすと云ハ誤なり古代の物ニ獅子頭の曽袁形獅子嚙ニ似たりとの事ニ是等もみな同ー物なり

飛禽圓文革　三笠山本談義屋ニ藏る鎧の中ニ此革を用ー一領なり

窠の文革　嚴島社ニ藏る古き鎧の窠文の革及び古き物ニみえたり此革昔ハ名も有ん未記せるものを見ず

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号　ゑ-74

雷公風伯文韋　南都春日神社ニ藏ムル鎌倉右大将ノ納ノ御鎧曽ノ吹返シヲ包ミシ物ノ此韋ナリ未他ニ見ルコトナシ

鴟文韋　是モ前ニ謂ル御曽ノ眉庇ヲ裏メル韋アリ軍中鴟ノ祥瑞ト記セシト諸書ニ出タリ鴟ハ八幡ノ使ハシメ給フト云ヨリ其象ニヨリシモノカヤ

雲珠文韋　南都興福寺ニ藏ル義家朝臣鎧ノ櫛擅ノ冠板ヲ裏ルモノ是ナリ

馬寺ニある古き甲曽ニもみゆ

龍文韋　嚴島社ニ藏ル大内義隆ノ甲曽悉ク此韋也春日社ニ藏ル鎧ニもみゆ

貘文韋　春日社ニ藏ケル古鎧ノ韋是ナリ

虎文韋　此韋ハ文ト色ノ虎ニ似タルヨリ号クナルベシ薩戒記ニ繪尻鞘ノ地虎ノ文是ナリ彩ニとある紙ニミゆ此韋虎ノ皮ニ倣テ尻鞘ニ用ひしもあるべし

鴛鴦文韋　高館草子ニ鴛鴦ノ脇盾ニとみえ則染韋ノ文ヲいふなり

錦韋　飾ニ小篠吹返シ錦韋とみゆ享徳御鞠記ニ錦韋ノ鞢とみゆ弓法秘書ニ錦韋と云ハ面韋ノ獅子ノ無キヲいふ物とみゆ裝束圖式ニも篠ノ裝束錦韋ヲ用ルとみえたり其文様々あるニハ定ルところなし色ヲ誤る事も然ル也今ノ世ニ御免革と云ハ是ニさえぎり貞丈軍器考頭書ニ錦ノ赤革と云ハ茜ニて染て白く文ヲ出シたるヲ云なるべし室町殿ノ頃錦韋と云將軍ノ外用ルことを禁ぜしもの染出せりとハ平人ハ禁ぜしニ故柿色ニ染て白く紋ヲ出シたるニ誰も用る故御免革と名付しなり今御免革とハ別なり

錦文赤韋　盛衰記ニ腰刀ニ錦ノ赤韋下ケて火打袋と云とみえたり其文錦ノ如くにて赤色ニ染シあり小紋ノ赤革とハ異なり

細文赤韋　古ノ鎧染韋ヲ以テ裏メる処ノ縁多くハ赤星五ツ宛攅或ハ四辨花ノ様なる物ヲ白く染出せりヲ用ル是ヲ俗ニ綵韋赤星あど云ヲ盛衰記ニ小紋藍韋とみえ古き画ノ袍ノ文ニ四辨花ノ水藻ヲ画るものなり

まべ小紋赤革ノ所見あしとの人どもハ准ど是ニ倣ふ世ニ薄ものゝ其花ノ

国立国会図書館　タイトル『革[ゼン]図考』　請求記号　ゑ-74

文も殺なるべきやや兵具小勝身とのみ祥瑞ありて勝武革とのみ
菖蒲革は假字をもてよく總ておして軍陣おい勝利のよをのみ故もん

細コ文藍韋　盛衰記平家物語ホ白山が旗は印ホいと
將軍家之記飾抄に黑漆の劍の裝束無紋藍韋とみえたるも
あるべし東山殿の頃記せるものホ帶取ハ菖蒲韋のよ
なり來るゆやさまべ有文と云へるも菖蒲韋のよなるもあるべし

菖蒲文韋　古の製ハ今世ホなる物と殊ホ勝まり御嶽の社ホ藏る鎧ホ花と覺しき形
に水鳥あり是等ハ總て古ホ其名聞えぞ宗五記ホ帶取菖蒲韋なりとも高忠聞書
ホ行騰の緒菖蒲韋ありとも三光院内府記ホ白太刀菖蒲韋の帶取なりともみえたり
諸書當用抄ホ弓袋の化粧韋竪菖蒲と見ゆ軍陣聞書ホ竪菖蒲と云ハ菖蒲ぜ
かり有を云とみえ共ホ其頃の名とこそ覺ゆ今ハ俗ホ杉立菖蒲韋といふ其文杉の
叢を遠く望ホ似さべあり凡形菖蒲文藍韋是ハ韋の製漸く下つ形の工を省きて

其文の形のミ染ら凡ハ如くみゆるを以て俗ホかく呼ぬるなり野馬菖蒲文藍韋軍
陣聞書ホ菖蒲文藍韋とも有を云とみえ共ホ其頃の名とこそ覺ゆ今ハ俗ホ杉立菖蒲韋といふ其文杉の
叢を遠く望ホ似さべあり凡形菖蒲文藍韋是ハ韋の製漸く下つ形の工を省きて
楓鹿菖蒲文藍韋　嚴島社ホ藏る處義家朝臣の鎧ときを用ひし所なり花形菖
蒲藍韋甲州管田天神の社ホ藏る小鎧にある所なり

菖蒲韋　世ホ菖蒲韋を勝武韋と書しも、なりとのみて前にのみ勝利を祝する義ハ
聞えず和名鈔ホみえし銀面の菖蒲形なるべき　軍器考頭書に菖蒲韋も古代藍白地と云
太刀の菖蒲作などホ古き物語ホきこえたり
一韋ハ其中の一種なるべし小櫻韋も藍白地の中の一種なり白地ハ總名ホて其
文ハ種々なるべき其文に依て名ぼくるなるべし

齒朶韋　盛衰記ホ此奈韋威とハ藍韋の文ホそぞ付らるる
此奈韋　品韋科韋四奈韋あど文字を假用ひし也齒朶ハ正月是を用ゐと下學集に

一本盛衰記ホ此奈を紫に寫し誤なるもみえたり

みそう歯朶ハ一名裏白とものハ正月祝ひ用るゆゑ是を文ハ染るなり歯朶と云
その呼ゆゑ処多き韋と云習ハせしなり軍器考補正ハ盛衰記ハ藍韋文さゑざ
まを付ると有る是ハ杉立菖蒲韋とありあるべし又同評云藍韋歯朶二枚向ハ合せ
ハ同き文ハ考るなり此物鞍馬寺にあり杉立菖蒲韋の事なるべしと誤まり

小櫻花白地藍韋　又藍白地を黄ハ返しる韋ハ捻て白地ハ韋の本色あり藍ハて櫻れ
花を抜染出せバ一面藍韋にあり曰く花の形出る是を黄ハ染まバ花ハ黄ハなり地の藍
も緑色ハあるなり是を黄ハ返しるとのハ小櫻のごとく限るべし保元物語ハ藍白地
板黄ハ返しるとなるも小櫻ハあるまじ今川了俊大草子の藍白地とそ白韋の
藍ハ摺らし用しありとみえても藍文白地の捻名なり又藍白地を黄ハ返しる小
紋韋此韋古き物ハ其文花菱と云る物の如し彼是同しき物ゆゑなるべし

薫韋　内藏寮式ハ薫韋の名みえたり享徳御鞠記ハ大納言為家卿ハ薫韋の韈を

許しめとみえ明徳記應仁記等に薫韋威の名みえたり此韋今ハ柑子韋と号るハ
其色の似さゑびあり色深きを濃柑子とも云り濃薫韋と云ハ鵐鷺物語ハ濃薫韋
の腹巻とみえたり俗ハ云茶韋是也絲ハ古に用ざる今茶褐との類なり又鈍色韋とハみえ江
次第抄ハ韈ハ鈍色の韋を以て鷹巣とすとみえたり胡曹抄ハ東山左府の御説とそ
鈍色ハ花田色ありとも或ハ青色に黒を入るなりとも是ハ深き色あハゆゑび薫ともを
ものなり纏薫韋隨兵日記より後なる書どもハ韈の革巻薫を用るを多くみえ是ハ引
目韋の如くハして薫あゆゑあり色の浅き纏の濶き狭きハ品あると云べしハも
なべて鶴纏韋世ハ鶴韋とのハ貞順記ハ韈の韋鶴巻あるべしとみえ又水巻韋
薫紋白地韋なり是等ハ天文永禄の頃より聞えたる名ゆゑなるべし
凡古き書ともハ深韋の名のみえを以て其物を見聞まるハハ写し止め或ハ真を謄
写し傳えも猶その數ハ列ねし且其文ハ就其形ハ依てそ書どもハ聞えし名ハ

ろ
74

推當て載るもなり全體の文大なるハ寡く出して剞劂の勞を厭ふも多〻予從来
此事ハ預る職ゆゑなればよく其真を知事あるを唯画巧を以て業とするハ
古の甲冑とも彩まる為ゆ摸寫せしを書肆の需ゆ應じて是と與ふ古書を引藏
まる所故も載しハ猶後に古玩好る人の補正を俟の一端あるを冀ふ謬誤を正し
拙さを笑見ゆるものと云事なし義信再誌

江戸　池田善司義信編輯

時維弘化二年　歳在乙巳春三月發市

国立国会図書館　タイトル『革［ゼン］図考』　請求記号 名-74